

八藤後忠夫先生のご退職に当たって

成田 奈緒子

八藤後忠夫先生は2023（令和5）年3月31日をもって定年退職される運びとなりました。専修を代表して、一言お礼の言葉を述べさせていただきます。

先生は2003（平成15）年に文教大学に着任され、それから20年の長きにわたり、特別支援教育専修の「顔」としてご活躍なさいました。専修では「障害児教育社会学」をはじめとする社会学・福祉学にまたがる分野を丁寧にご指導されてきました。2017年からは三郷特別支援学校との連携事業であるサマースクールを実施されるなど、特別支援教育専修の学生たちのために尽力されました。一方で、2016（平成28）年からは、教育学研究科の専攻長として大学院生の指導と統括に邁進されています。

また、専修では2006（平成18）年からは継続して専修主任の役を買って出てください、その統率力は学生をして「親分」と言わしめる素晴らしいものです。特に若い人たちの面倒見がよく、コロナ前は折をみて学生や助手さんを率いて飲みに行っては、彼らの心の内を聞き出して就職や恋愛の相談に乗ってあげていました。北国（新潟県村上市）生まれのお酒の強さは筋金入りでして、焼酎のロックを一回に2杯ずつ注文され、水のように飲み干されているお姿が今でも印象に残っています。

八藤後先生は、一見するとちょっと強面で屈強な外観なのですが、実態は繊細すぎるほどの細やかな心をお持ちの紳士です。ノートが机と平行に置かれてないと気になる先生に、雑な私はいつも行動や言動を直されていました。一番印象に残っているのは「すごいきれいな花」という言葉遣いを「すごく、と言わないと文法的にNG」と毎回毎回直されつづけたことです。すごい、は形容詞なのでそのあとに形容詞はこない！と、いつのまにか私自身も「すごいかわいいです」というアナウンサーの言葉に引かかるようになってしまい、ついには自分の子どもに口を酸っぱくして「すごいきれいっていい方はNG」と伝えるようになりました。このように「正しい日本」の純然たる継承者の八藤後先生は、もちろん日本の伝統的な文化・芸術にも精通していらして、書や和太鼓、笛や民謡などなんでもプロ級なのです。謝恩会やジュースコンパなどで先生の演奏や歌を聴かせていただけるのが、コロナ前の毎年の楽しみでした。和太鼓のサークル「出津龍」を、慕ってきた有志の学生たちと立ち上げ、熱心に指導をされていたことも記憶に残っています。

大学教員としての業績は枚挙にいとまがありませんし、次頁に記載されていると思いますので長々とは申しませんが、ご研究においては統計解析のプロであり、常に緻密な仮説検証のプロセスを通じて現象を論理的に考察する眼をお持ちでした。私も何度となく自分のデータ解析に関してお知恵を授けていただいて、窮地を乗り越えた経験があります。

何より、先生の2年後に着任した右も左もわからない私に、ほかの誰よりも親身になって接していただき、特支のあれこれを教えてくださった御恩は今もこれからもずっと忘れません。

八藤後先生、本当にお世話になりました。ありがとうございました。

まずは長年使い続けて疲弊した腰を2012年に手に入れられたご自慢の邸宅でゆっくり過ごして治して

ください。その後はぜひ多趣味を活かした「すごい」第二の人生を花開かせてくださいね。期待しています。

(なりた なおこ 文教大学教育学部特別支援教育専修)